（要約）

蔣介石の外交戦略と日中戦争：一九三七－一九四一

陳春松

本論文は、日中戦争勃発から太平洋戦争勃発までの時期を取り上げ、蔣介石の対英米、対ソ、対日外交および彼の外交思想を再検討した。周知のように、日中戦争における蔣介石の抗日戦略は、「苦撑待変」（劣勢に耐えて情勢が中国に有利に転じてくる時を待つ）を基本方針とした。軍事戦略面では「苦撑」すなわち持久戦の堅持、外交戦略面では「待変」すなわち国際情勢が中国に有利に転じてくる時を待つという考えであった。それは、消極的に待つというわけではなく、中国の味方を増やすと同時に、日本を孤立させ、弱体化させることを意味した。すなわち、蔣介石は日中戦争を日中両国間のみの戦争とは考えず、積極的に列国を巻き込み、国際連合戦線を組むことによって日本に勝利しようとした。その意味で、この方針は情勢変化を「待つ」だけでなく、情勢変化を「求める」ものであった、と言えるだろう。本研究では蔣介石の外交戦略を、日中戦争を国際化させるための戦略だと定義したうえで、その内実をより詳細に解明した。

本論文では、蔣介石の外交戦略に関して、従来の先行研究で分析が不十分であった三点を解明した。

第一に、蔣介石の対英米外交である。蔣介石は日中戦争に勝利するため同戦争を国際化させる戦略を取ったが、彼がそのために期待を寄せたのは、ソ連および欧米の大国（英米仏）であった。特に英米は、蔣介石が味方として取り込もうとした主要な対象であった。英米は当時、極東において強い影響力を持った大国であり、極東秩序の維持者でもあった。そのため、蔣介石は積極的に英米との連携を求めようとした。英米は蔣介石の日中戦争国際化戦略における最も重要な外交対象であったと言っても過言ではない。結果から見ると、中国は太平洋戦争勃発後に英米と同盟関係を結び、連合国対枢軸国という形で日中戦争を国際化することに成功した。本研究は、蔣介石が対英米外交を一体のものとして行っていたことに注目しつつ、この過程を具体的に明らかにした。彼が一貫して求めていたのは、英米が一致協力して行動することであった。英国は、ヨーロッパにおいてドイツ、イタリアからのプレッシャーにさらされていたため、極東において日本との関係を悪化させることを躊躇し、自国の利益のためしばしば日本に譲歩した。一方、米国は国内の孤立主義思想の影響力が極めて強かったため、極東の事案に過度に関与せず、他国と連合して行動することを避ける傾向もあった。蔣介石は日本が英米の不一致を利用して中国侵略を進めることを深く懸念し、英米が不可分でなければならないという認識のもと、積極的に英米の連合を促した。

第二に、蔣介石の対ソ連外交について検討した。先行研究は、蔣介石の対英米外交に着目する一方で、彼の戦略の中におけるソ連の重要性に十分な関心を払ってこなかった。しかし、実際には蔣介石はソ連

を非常に重視しており、同国を対日戦争に引き込むことで日中戦争の国際化を実現した。また、彼は日ソ戦の勃発も大いに期待し、そのための働きかけも積極的に行った。もっとも、蔣介石が熱心にソ連を対日戦争に引き込もうとしたのは、彼がソ連および共産主義に対して根強い不信感を有していたことと関係していたことも重要である。すなわち、目前の敵である日本と潜在的脅威であるソ連が戦争を行えば、日中戦争の国際化が実現できるのみならず、中国にとって有利な情勢が生まれると蔣介石は考えていた。

第三に、蔣介石の日本観や日本の国内情勢に対する洞察を明らかにした。蔣介石は、中国の抗日戦が最終的には必ずや勝利に終わるという自信を持っていた。その自信を支えていたのは、先行研究が強調してきた国際情勢への期待のみならず、日本の国内情勢の変化に対する期待でもあった。彼は、日本が長期戦に耐えられず、いずれ進退窮まるはずだと判断していた。また、日本が強引に戦争を継続すれば、やがて日本が内部崩壊するだろうと蔣介石は確信していた。すなわち、蔣介石は日本の内部崩壊を列強からの干渉と並んで戦争終結の方法として重視していた。それと同時に、蔣介石は、日中戦争をアジア同士の「共食い」だと捉え、日本が自己反省して、武力侵略という誤った政策を完全放棄することにも期待を寄せていた。日本の内部崩壊と日本の自己覚醒は、矛盾したものに見えるが、蔣介石はそのいずれも戦争の終結につながり得ると考えていた。蔣介石は日中戦争の延長による日中の共倒れを望んでおらず、むしろ日本が早く内部崩壊するか、または自己の錯誤を反省して中国との和平に動くかのいずれかを期待していた。日中両国が恨みを解消し、誠意をもって提携することは、蔣介石の一貫した希望だったと言える。

本論文では、蔣介石と英米、ソ連、日本の関係を検討するに際して、彼が「敵」と「友」をどのように位置づけていたのかによく注意し、戦前、戦中、戦後を通観することに留意しながら分析を進めた。蔣介石は日本の侵略に抵抗するため、主に英米ソを取り込もうとしたが、すべてにおいて英米ソに傾倒していたわけではない。英米をはじめとする欧米列強は、近代以降の中国を含むアジアに重大な災禍をもたらした。近代中国の大きな目標は、帝国主義を打倒し、半植民地的な地位から脱却することであった。日本の侵略に抵抗するために中国は英米に援助を求めたが、中国と英米との不平等な地位は、蔣介石の民族的自尊心を傷つけていた。蔣介石は中国が英米から不当に軽視され、不平等に扱われているとして強く憤っていた。また、蔣介石はこの批判を人種差別問題にまで広げて解釈し、英米をはじめとする白人はアジアの黄色人種を軽視していると考えていた。したがって、蔣介石は英米仏との連合戦線を望んでいたものの、英米に対しては常に批判的な視点を持ち、英米の対中姿勢の是正、英米との平等的地位の獲得にも大きな力を入れていた。

ソ連に対しては、蔣介石は戦前から既に強い不信感を持っており、ソ連を日本よりも恐ろしい敵だと

見なしていた。蔣介石はソ連が国民政府の中国統治を覆し、世界戦争を傍観した後で「世界革命」を発動する野望を持っていることを警戒していた。それゆえ、蔣介石が積極的にソ連の対日参戦を働きかけた背景には、それによってソ連の力を消耗するという狙いも含まれていた。

逆に、中国の敵である日本に対して、蔣介石はむしろ潜在的に日中提携の可能性を排除していなかった。近代中国と対照的に、日本は明治維新に成功し、アジアで唯一の強国となった。元来蔣介石は、日本と提携し、中国さらにアジアの復興を実現するという構想を持っていたが、中国への侵略により、日本は欧米列強に代わる中国の当面の敵となってしまった。それにもかかわらず、彼は日中戦争の無制限の継続を望んでおらず、むしろ戦争の早期終結を望んでいた。日中戦争後を見越した中国およびアジアの未来という長期的な視点から、蔣介石は日中両国の提携という望みを捨てていなかった。要するに蔣介石の最終目標は、日本を撃破することではなく、近代以降の中国が失った独立、自由、平等を取り戻すことであった。

以上の問題意識を踏まえ、本稿は一九三七年の日中戦争の勃発から一九四一年の太平洋戦争の勃発までの時期を取り上げ、蔣介石の外交戦略を再検討した。この時期はいわゆる中国の単独抗戦期であり、太平洋戦争勃発以降における対立構図が固まっていたわけではなかった。日中戦争の終結についてもまだ明確な見通しがなく、蔣介石の戦略思考も複雑に変化していた。太平洋戦争が勃発すると、連合国対枢軸国という対立構図が固まり、蔣介石の戦略もそれを前提としたものに変わるため、それ以前の時期とは異なる分析が必要になる。そのため本研究は太平洋戦争勃発までを対象とし、それ以降については将来の課題としたい。本稿では、蔣介石の外交戦略の全体像をより詳細に解明するとともに、蔣介石の戦後構想、日中関係に対する見方などについても、新たな解釈を提示する。これらは、現在の日中関係や東アジア国際関係に対する理解を深めることにもつながると期待される。

本論文は、以下のように四部構成とする。

第一部と第二部では、蔣介石の日中戦争国際化戦略の中で最も重要な対英米外交を取り上げ、彼と英米の関係を再検討する。二部に分けたのは、蔣介石の対英米外交が非常に重要であり、内容が極めて豊富だからである。第一部（第一章－第五章）では、日中戦争の勃発から日独伊三国同盟が締結されるまでの時期を取り上げる。第一章では、日中戦争勃発以前の中英米関係、蔣介石の英米観を紹介したうえで、日中戦争の勃発から武漢会戦の終結前後にかけての彼の対英米外交を分析する。同戦争勃発後の一年間、蔣介石は積極的に英米の干渉を求めていたが、それらは順調に進展したとは言えなかった。しかし、蔣介石は英米に対する働きかけを継続した。他方で、この一年の間に、英米の行動が一致しないという中国にとって不都合な状況がしばしば現出した。いかに英米の極東政策を一致させるかということは、蔣介石の対英米外交において重要な課題となった。さらに、中国の抗戦が一年間続く中で、蔣介石

は中国の期待に応じない英国に対して不満を噴出させる一方で、米国の重要性をより強く意識するようになった。

第二章と第三章では、武漢会戦後から第二次世界大戦の勃発までの時期を扱い、蔣介石の英米に対する態度の差を比較し、具体的に分析する。武漢会戦以降、英国は中国に財政援助を行うようになったが、中国に対する援助は限られており、積極性に欠けていた。さらに英国は、中国における利益を維持するため、日本と妥協する傾向もあった。蔣介石は日本の挑発的な行為に対して、英国がより強硬に反撃することを期待していたが、英国が彼の期待に応えなかったことに失望し、不満を抱いていた。蔣介石は、英国の政策を利己的で帝国主義だと批判していた。また蔣介石は、英国が中国の地位を重視せず、抗戦の意義を理解していないと考えていた。そのため、蔣介石は繰り返し中国の抗戦の重要性を英国に訴えた。一方、蔣介石の米国に対する見方は対照的であった。チェコスロバキア問題が緊迫化した際、蔣介石はヨーロッパ情勢に忙殺される英仏の対日宥和を深く懸念する一方、日中戦争とヨーロッパの紛争に直接巻き込まれていなかった米国の重要性を意識するようになった。蔣介石は個人的にもローズベルト大統領を高く評価していた。さらに、蔣介石は米国の態度が日英関係に大きく影響すると確信しており、英国の対日妥協を阻止するためには米国からの働きかけが不可欠だと考えていた。彼は、極東において英米が歩調を合わせて連携することを強く望んでいた。

第四章では、第二次世界大戦の勃発から一九四〇年夏（英仏の援蔣ルートが閉鎖された時期）までの時期を扱う。世界大戦の勃発により、英仏は日本と妥協する傾向がより顕著となった。蔣介石は英仏を批判する一方、引き続き米国に対して多大な期待を寄せた。しかし、この時期には彼の米国に対する批判も始まった。それは、米国が中国に対する経済援助を躊躇する一方で、英仏を優先的に支援したからである。蔣介石は、米国をはじめとする白人に差別されているという意識を深めた。

第五章では、英仏の援蔣ルートの閉鎖から日独伊三国同盟が締結されるまでの時期を扱う。英仏が次々と日本に譲歩し、米国の経済援助も難航したこの時期は、中国の抗戦史上で最も困難な時期の一つであり、蔣介石の精神的な苦痛も大きかった。蔣介石は英米に対して失望し、批判を繰り返した。しかし、不満を持ちつつも、蔣介石は様々な意見を排除し、親英米路線を堅持した。この時期の蔣介石は、日本が英米の不一致を利用して南進政策を進めることを深く懸念し、引き続き英米が同一の極東政策をとることを望んでいた。

第二部（第六章－第八章）は、第一部の内容を引継ぎ、一九四〇年九月の日独伊三国同盟の締結から太平洋戦争の勃発までの蔣介石の対英米外交を検討する。この時期、世界中における対立構図がますます固まり、英米両国にとって中国の対日戦の意義も次第に増大したため、中国と英米の関係は一層緊密化した。しかし一方で、中国と英米の摩擦も増した。蔣介石の民族的自尊心は、この時期に最もはっき

りと読み取れる。一九四〇年九月以降中国の重要性が増大したにもかかわらず、中国が有すべき平等的地位を依然として獲得できなかったという落差が、彼の不満の原因の一つであった。各章の概要は以下の通りである。

第六章は、日独伊三国同盟の締結後から一九四〇年一二月までの時期を扱う。三国同盟の締結により、中国の重要性は相対的に増し、その地位は改善された。この間蔣介石は三国同盟を利用して、英米の中国を軽視する態度を是正しつつ、中英米の平等な提携関係を構築しようとした。

第七章では、独ソ戦争の勃発までの時期を扱う。中英米の提携案が英米から前向きな反応を得られなかったため、蔣介石はより実務的な対英米外交を展開するようになった。具体的には、英国に対しては軍事同盟の締結、米国に対しては物資の援助を要求した。一方、中英米交渉における英米の種々の行為は、蔣介石の不満を引き起こした。蔣介石は、従来以上に英米の姿勢を人種差別的であると捉えるようになり、それらを英米の中国に対する軽視、白人としての優越感の表れではないかと考えた。

第八章では独ソ戦争勃発から太平洋戦争勃発までの時期を取り上げる。同時期において、英米はヨーロッパ戦争を最優先とし、依然として日本との正面衝突を避けていた。米国は日本との秘密交渉も行っていた。蔣介石は、英米が中国を犠牲にして日本の南進を牽制しようとしているのではないかと疑い、英米の利己主義を激しく批判した。この批判は、太平洋戦争勃発後も続いた。

第三部と第四部は、蔣介石の外交戦略の重要な二つの側面、すなわち日ソ戦争の勃発と日本の国内情勢変化に対する彼の期待およびその実現のための努力をそれぞれ分析する。本研究は、蔣介石が長期抗戦方針を堅持しつつ、世界大戦の勃発のみならず、日ソ戦の勃発と日本の国内情勢の変化も期待していたことを主張する。第三部と第四部においては、日ソ両国に対する蔣介石の感情についても検討する。ソ連は中国の対日戦を支援したものの、ソ連に対する蔣介石の不信および警戒心は根強く持っていた。一方、蔣介石は元来日本と提携する意向を有していた。日中戦争勃発後も、蔣介石は戦後の日中提携を依然として断念していなかった。

第三部（第九章－第一三章）は、日ソ戦誘発のための蔣介石の外交的努力について分析する。各章の概要は以下の通りである。第九章では、満洲事変以降の蔣介石の「日ソ先戦」論を紹介した上で、日中戦争以降彼がどのようにソ連に参戦を要請したかを検討する。特に、彼がどのようにソ連の参戦のために有利な国際環境を作ろうとしていたかを分析することに力を入れる。

第一〇章では、高宗武の対日折衝（一九三八年四月から七月まで）を中心に、日中和平と日ソ戦の関連性に対する蔣介石の考えを分析する。

第一一章では張鼓峰事件に対する蔣介石の対応について考察し、同事件が日ソ全面戦争まで発展することを彼が期待していたこと、さらにその全面戦争の勃発を引き起こすため、彼がソ連および英仏に積

極的に働きかけたことを明らかにする。

第一二章では、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発する以前から、蔣介石がソ連を媒介として日中戦争を世界大戦と結びつける発想を持ち、ソ連や英米仏に種々の働きかけを活発に行っていたことを解明する。

第一三章では、第二次世界大戦の勃発から太平洋戦争の勃発直後までの時期を取り上げる。第二次世界大戦勃発後、当面日ソ戦の可能性は低くなったが、蔣介石が日ソ開戦の誘発を断念したわけではなかったことに注目し、彼がこの目標を一貫して追求していたことを引続き明らかにする。

第四部（第一四章－第一八章）は、蔣介石の日本観や日本の国内情勢の変化に対する期待をテーマとする。第一四章では、日中戦争の勃発から武漢会戦の終結までの時期を取り上げ、蔣介石が国際情勢の変化と日本の内部崩壊を期待しつつ長期抗戦という道を選んだ点、積極的に宣伝を利用して日本国民の反省を喚起しようとした点、日中戦争をアジア民族の「共食い」だと捉えて日本軍閥の頑冥を批判した点を明らかにする。

第一五章では、武漢会戦の終結から第二次世界大戦の勃発までの時期を扱う。武漢会戦が終わって以降、日中戦争は長期化の様相を呈した。蔣介石は日本の内外情勢に対する分析から、日本の国内崩壊が間もなく来ると予測していた。また、蔣介石はこれまでと同様、自らの言論が必ずや日本に精神的打撃を与えることができると確信しており、それによって日本が早急に対中戦争の過ちを認識して欲しいという期待を持っていた。彼は明治維新や明治時代の日本を高く評価する一方で、同時代の日本軍閥および日本の政治家に対する評価は非常に低かった。

第一六章では、第二次世界大戦勃発後の極端に不利な状況の下でも、蔣介石が抗戦を維持しながら、日本の内部崩壊を依然として期待していたことを明らかにする。この時期に彼が国際的な解決よりも日本の内部崩壊を日中戦争の終結策として期待していたこと、日本の内部崩壊の可能性を唱えるのは自らを慰め、中国軍民の抗戦の意志を安定させる狙いもあったことも指摘する。さらに、彼が世界大戦に乗じて日本が侵略を拡大しようとしていることを看破し、日本の侵略による自己壊滅を懸念し始めていたことにも注目する。

第一七章では、日独伊三国同盟の締結から独ソ戦の勃発までの時期を扱う。蔣介石は世界情勢の変化に満足し、日本の失敗の必至、中国の抗戦の必勝に対する自信を深め、無謀な対外侵略の拡大が日本の自己壊滅を招くと判断した。一方、彼は日本軍閥が途中で侵略を止めることが有り得ないとも考えており、日本が無謀な対外侵略の拡大を続け、自己壊滅の道を辿っていくことを痛惜した。

第一八章では、独ソ戦の勃発から太平洋戦争の勃発の時期を取り上げる。蔣介石が日本の南部仏印進駐を英米の制裁を招くという観点から歓迎し、日本が屈服しなければその壊滅が避けられないと判断す

る一方で、依然として日本の完全な壊滅を望まず、日本の最後の改心を期待していた点を明らかにする。

総じて言えば、蔣介石は日中戦争国際化戦略に沿って外交を進め、日中戦争を世界大戦に結び付けることに成功した。最終的に中国は一九四五年八月に連合国の一員として世界大戦の勝利者となった。蔣介石が英米ソの力を巧妙に利用して日本の侵略への抵抗に成功したことは、これまでも先行研究で肯定的に評価されてきたが、筆者も基本的には同様に評価している。

しかしその一方で、彼が英米ソとも「闘争」し、中国の国益を守ろうとしていた点にも注目すべきである。蔣介石の最終目標は、日本を撃破することではなく、近代以降の中国が失った独立、自由、平等を取り戻すことであった。さらに、彼が日中戦争という枠を越えて、戦後の中国ひいてはアジア全般を常に長期的視点から見ていた点も評価すべきであろう。それゆえ、蔣介石は、戦略的ビジョンを持つ政治家であったと評価できるというのが、筆者の結論である。

最後に付言すれば、本稿は決して蔣介石が反ソ、反英米あるいは親日的だったことを証明するものではない。ソ連への牽制、中国の独立・自由の回復にあたって、彼は日本の重要性を強く認識していた。英米のことは嫌悪していたものの、両国と対決することは一切考えていなかった。蔣介石が反対したのは、あくまで英米の中国に対する差別的待遇に対してであり、戦後の英米との提携も戦中から蔣介石の想定の中にあった。ソ連に対しても絶えず警戒していたものの、決して冷戦期のように明確に反共を掲げたわけではなかった。蔣介石の考えの出発点は、あくまでも中国の独立・自由の回復であり、中国の国益であった。したがって、蔣介石の英米、ソ連や日本に対する姿勢を分析する際には、前提として彼が現実主義者、民族主義者であったことを理解しなければならない。本稿の目的は、これを前提として、国際政治に対して蔣介石が独自の思考を持っていたことを明らかにすることにあった。